愛知大学綜合郷土研究所ブックレット

33

ふるさと「私」の始原

武田 圭太

●目 次●

はじめに 3

一 「私」の始まり 5

1 心身の造型 5　2 学童期の交流 6　3 「私」の座標軸 7

二 ふるさとのウチとソト 9

1 都会へ移動する若者 9　2 東京に定住する地方出身者 10

3 同郷者のふるさと共有感 12

三 ふるさとの記憶 15

1 ふるさとを表現することば 15　2 ふるさとのエピソード記憶 18

四 ふるさとの心象 20

1 ふるさとの心象化 20　2 ふるさとの記憶と想像 21

五 ふるさと心象の測定 23

1 ふるさと心象の項目 23　2 ふるさとの対象化 24

3 ふるさと心象の構成要素 28　4 ふるさと心象と故郷での定住 32

5 ふるさと心理の構造 35

六 ふるさとの見えざる力 42

1 ふるさとの影響 42　2 中年期の「私」 43

七　夫のふるさと妻のふるさと　48
1　ふるさとの異同　48
2　夫のふるさとへの違和感　49
3　夫の故郷へのかかわり　52
4　妻の故郷へのかかわり　56
5　故郷に定住　58
6　定住した故郷へのかかわり　59
7　地域活動の原動力　61
8　二つの故郷　62
八　「私」の終わり　64
1　学童期と高齢期との関係　64
2　ふるさとへの「私」の回帰　65
むすびに　67
註　69
引用文献　70

はじめに

ふるさとは不思議なことばである。ふるさとを目にしたり耳にしたりすると、心が揺れこみあげる感情に押されて、想起したふるさとについてあれこれと思いを巡らせてしまう。ふるさとにまつわる情動は思考を誘発し行動を喚起する。

ふるさとに誘われた人は、例えば、ふるさとフェアで地域の特産品を買い求めたり、郷土教育をとおして生まれ育った町の自然や生活、歴史や文化や伝統を学んだり、ふるさと創生事業で地域の振興と活性化を企図したり、ふるさと納税を利用し寄付することで所得税の還付、住民税の控除を受け、自治体から返礼品を受け取ったりする。ふるさとの人を動かす力は、世代を越えて老若男女に影響するから、さまざまに消費され活用されている。

このように出生地が異なる多くの人がふるさとを共有できることは興味深い。生まれ育ったところの実体である「故郷」と、故郷にかかわる人や事物や出来事などの意味や内容の表象としての「ふるさと」とを使い分けたほうがよさそうである。

ふるさとは、人が故郷での経験にもとづいて創造した心象の全体であり、「私」らしい感じ方や考え方の基礎を形成したところといえよう。ふるさとの心象は、主に小学校を卒業するまでの原体験に根差しているようである。故郷は違っていても小学生時代に学校で経験する出来事は、概ね共通するだろう。小学生の場合、日常の生活圏は家庭や近隣の地域社会にほぼ限定できそうなので、そこでの諸体験も類似しているかもしれない。人それぞれ異なる故郷の思い出はふるさとに集約され、互いに意思疎通でき共感しうることばとして使われている。

ふるさとは論理より感情が先行する概念と思われる。感性が柔らかい学童期に、「私」らしい

感じ方や考え方の原型が故郷でかたちづくられる。「私」らしさの形成は学童期までが臨界かもしれない。したがって、ふるさとは「私」の始原であり、ふるさとを原点に時間と空間の両軸を座標軸にして構成される枠内を、加齢にともなって動いたり止まったりする「私」の位置の軌跡を生涯にわたって描くことができるだろう。生涯の過程で「私」の位置を見失ったり、「私」らしさを実感できなくなったり、「私」の進むべき方向に迷ったりしたとき、人はふるさとを思い起こして「私」の原点を確かめ困難な状況に対処しようとすることもあるだろう。ふるさとは戻りたいときそこにある場所で、「私」のよりどころといえよう。